

資源管理型漁業推進総合対策事業

(広域回遊資源：日本海北ブロック) 調査一抄録一

天然資源調査：山田 嘉暢・早川 豊^{*}・山内 高博・小泉 広明
栽培資源調査：山内 高博

発 表 誌 名

平成5年度広域資源管理型漁業推進総合対策事業報告書 平成6年3月青森県（日本海北ブロック）

抄 録

1. 天然資源調査

(1) 漁 獲 量 調 査

① ヒ ラ メ

日本海側主要6漁協の平成5年1月から12月までの漁法別銘柄別漁獲量を調べた。

漁法別漁獲量は、定置網52.6トン（63%）、沖合底曳網20.1トン（24.1%）、刺網8.0トン（9.6%）、一本釣り2.7トン（3.2%）、その他、0.002トン（0.1%）であった。

② マガレイ、マコガレイ

日本海側主要6漁協の平成5年1月から12月までの漁法別銘柄別漁獲量を調べた。

マガレイの漁法別漁獲量は、沖合底曳網44.9トン（47.5%）、定置網42.9トン（45.3%）、刺網6.7トン（7.2%）であった。

マコガレイの漁法別漁獲量は、定置網47.8トン（68.7%）、沖合底曳網16.7トン（24.0%）、刺網5.1トン（7.3%）であった。

(2) 生 存 率 調 査

平成元～3年に実施した資源管理指針を作成するための調査の補完調査として、刺網と沖合底曳網で漁獲された異体類を再放流した場合の生存率を推定するための調査を実施した。

刺網では、ヒラメが100%、マガレイが100%、マコガレイが41.2～100%の生存率であった。沖合底曳網では、ヒラメが0%、マガレイが73.9%の生存率であった（調査は漁獲後直ちに水槽に収容して1～3時間後の生存率で判定した）。

(3) 市 場 調 査

大戸瀬漁協における銘柄小カレイの魚種組成を調査した。

尾数割合ではマガレイは冬季（1～4月）に多かった。マコガレイは周年見られたが、特に夏～初冬（6～11月）に多かった。

(4) 稚魚発生量調査

ヒラメ稚魚の発生量を把握するために、日本海沿岸水深5～10m（脇元～鰺ヶ沢）を桁網により曳網した。

※現、青森県水産増殖センター

平成5年8月3日の調査では、天然ヒラメが122尾採集され、全長範囲が2.2～8.7cmであった。平成5年8月25日の調査では、天然ヒラメが94尾採集され、全長範囲が4.6～12.2cmであった。

平成5年における、日本海の砂浜域における天然ヒラメ0歳魚の推定生息尾数は、8月3日の採集尾数から約240万尾と推定された。

(5) 魚体測定調査

主要2漁協に水揚げされたマガレイ・マコガレイの魚体測定を実施した。

2. 栽培資源調査

(1) 漁獲統計調査

1) タイ類漁獲量の経年変化について

本県日本海側における漁獲量は、1964年以前には、350 t 前後であった。その後漁獲量は減少傾向を示し、1981年まで100～200 t の範囲で推移したが、以降、さらに減少を続け1988年には30 t と最低を記録した。しかし、1989年以降増加傾向となり、1993年には146 t まで回復した。

2) タイ類漁業種類別漁獲量

平成5年における漁獲量の盛期は、5～6年と11～12月に見られた。また年間の漁業種類別漁獲量では、定置網（底建網）が最も多く82.3%を占め、次いで沖合底曳網7.0%となり、この2漁業種類で全体の89.3%を占めた。

3) マダイ銘柄別漁獲量、漁獲金額、漁獲尾数

平成5年の大戸瀬漁協における銘柄組成は、漁獲量ではP（15cm未満）～3P（18cm～22cm）が66.3%を占め、漁獲金額では半1（0.8～1.5kg）～笹（22cm～24cm）が58.6%を占めた。しかし、漁獲尾数ではP～3Pで92.5%を占めており、小型若齢魚が漁獲の主体となっていた。

(2) 市場調査

1) マダイ率（タイ類漁獲物に占めるマダイの個体数割合）

平成5年4～12月については、各銘柄のうち特大（6kg以上）～半2（0.4～0.8kg）まではマダイが100%であるが、小～3Pにかけては、銘柄が小さくなるほど低下する傾向を示した。月別に見ると10～12月の3Pのマダイ率が31.1%と最も低い値を示した。

(3) 魚体測定調査

平成5年4月～12月のマダイの年齢組成をみると、4～6月は1才魚が主体で86.2%、7～9月は1～3才魚が主体で97.6%、10～12月は1～2才魚主体で97.5%を占めた。なお0才魚の漁獲はこの期間を通じてなかった。